

石川三四郎

——海老名弾正との関連において——

辻野功

一 恋愛・入信・社会主義

明治の幸徳秋水、大正の大杉栄と並べて昭和のアナーキズム運動の代表的理論家と称される旭山・石川三四郎は、周知のように明治時代にあつては誠実なキリスト教社会主義者であつた。石川三四郎は一八七六年（明治九）五月二三日埼玉県児玉郡山王堂村の戸長五十嵐九十郎の三男として生まれたのであるが、徴兵逃れのため三歳の時跡つぎのいない老夫婦だけの石川家に名目上入籍した。彼の生家は板垣退助を礼讃する熱心な自由党一家であつて、彼の長兄幸三郎と次兄犬三は後に同志や親戚のものたちと政敵改進黨の連中に硫酸を浴びせるといふ、いわゆる埼玉硫酸事件をひきおこし、次兄は控訴審で無罪となつたものの、長兄は一年の刑を申し渡されたほどであつた。このような家庭環境から、彼は自由民権運動の有力なメンバーである埼玉県秩父郡出身の茂木虎次郎（後に佐藤虎次郎、代議士）や埼玉県人間市出身の橋本義三（後に粕谷義三、衆議院議長）と知りあい、さらに彼らを通じて桜井平吉（飯

田事件の首謀者)・中島信行・福田友作らの急進的自由主義者と知りあつた。ことに茂木・橋本・桜井とは東京で一時居を共にしたことがあり、これらの急進的自由主義者がかもし出す社会変革への熱情は、多感な少年時代の石川に大きな影響を与えた。

石川は哲学館(東洋大学の前身)に入学して勉強したが、当時寄食していた福田家の生活が困窮に陥つたため、在学一年余りで中退して帰郷した。その後小学校代用教員を勤めた後一八九八年(明治三二)再度上京し、今度は東京法学院(中央大学の前身)に入学した。この東京法学院時代に、彼は「一生涯の運命を決すべきさまざまな激浪と渦巻とに翻弄され」たのであつた。その頃福田友作・英子一家は飯田町から郊外の角筈に転居していた。その福田家をよく訪ねた石川は福田友作の酒の相手をし、汽車がなくなつて泊まることもしばしばであつた。ところが福田家には一九歳の若い娘がいた。彼女は婚約者がアメリカにいつていたので、その間福田家にあずけられていたのであつた。石川三四郎の方も一八九九年の元旦に下宿の親戚である石川家で開かれたカルタ会が機縁になつて、同じ姓の石川家の養子になつており、養家には婚約者がいたのである。この婚約者をもつ者同志がどう魔がさしたのが結ばれてしまい、石川は若い娘を妊娠させてしまった。月満ちて子供が生まれた。その頃福田友作は病のため亡くなつており、福田英子に相談の結果、彼女とは別れ、子供は兄犬三夫婦に育ててもらふことにした。そして石川家の恩顧を受ける資格がないとして養子縁組を解消してもらい、「きらいではなかつた」婚約者とも別れた。その頃の石川はいささか狂的であつて、その状態を、「犯した罪から免がれようとする私は、そのために悶え狂つて、何処にでも慰安を求めようとする。急に夕立に追いまくられて、どんな木陰、どんな軒端をも頼みにして駆けよるように、少しでもやさしい異性を見ると、すぐ近づくようになりました」と述べている。そして石川は、墮落した

生活に対する悔悟から、教会の扉をたたくようになった。この過程について、彼は『自叙伝』において、つぎのように述べている。

「悩みに堪えず、何時とはなしに、耶蘇の教会に足を運ぶようになりました。はっきり意識したわけではないのですが、『救い』を求めて行つたのです。そしてかつて経験したことのない光明と元氣とを与えられたのが、本郷教会の海老名弾正先生の説教でありました。私は全我を傾けて海老名先生に没頭しました。そして洗礼を受けました。それは東京法学院を卒業する少し以前のことでした。⁽⁴⁾」

かくして石川は海老名弾正の門下にはいつたのであるが、実はキリスト教との接触は、これに先だつて内村鑑三によつてもたらされた。彼は別の箇所⁽⁵⁾で、つぎのように述べている。

「独立雑誌は予をして初めて内村先生を想わしめ、（中略）予は先生に依りて始めて心を基督教に傾けたり、今を去る四年前、予は種々なる事情に囚り、熟々人生の無常を思い、慰藉求むるに道無く、鬱々として苦悶懊惱すること一年有余、適々壹岐毘坂なる本郷会堂は予をして海老名先生に接せしめき、予は先生の説教に激動せしめられ、端なく一道の光明に接したり内村先生は予が発心の師にして、海老名先生は予が再生の父なり⁽⁵⁾」

ところで養子縁組を解消した石川は、養家の親戚であるそれまでの下宿にいるわけにはいかず、新たな下宿に移った。ところがその新しい下宿で、彼は恋に陥った。そこにはお茶の水の高等師範にいつている澄子という娘がおり、その澄子と愛し合うようになったのである。

その澄子から「高等官にでも弁護士にでもなられるよう、試験を受けて下さい。そうしないと親達にも話せないから」と言われた石川は、東京法学院を卒業すると、身を立てるため弁護士試験・司法官試験・高文試験を受けた。石川は合格を信じて疑わなかったのであるが、弁護士試験と高文試験は落ち、司法官試験は大腸カタルのために受けられなかった。大きな挫折を味わった石川は、花井卓蔵と堺利彦の紹介で万朝報社に入社した。花井卓蔵とは、以前からの知合であった。堺利彦と知合ったのは、堺が福田家の隣に引越してき、福田英子から紹介されたのであった。万朝報社では社長黒岩源香の秘書をかねるかたわら、寄贈図書 of 整理と書評を担当した。ここで彼は先輩記者である内村鑑三・堺利彦・幸徳秋水から直接間接の薫陶を受けたのである。

しかしながら挫折の結果の余儀ない万朝報入社は、澄子との仲をさくことになってしまった。その間の経緯は明らかではないが、かつては石川の将来に見込みがあった澄子の母の意志が大きく作用したと想像される。この澄子という女性は恋多き石川の生涯においても決定的な女性であって、後の平民社時代のことを回想して、石川は「当時、平民社に頻繁に出入する山路愛山であったかと思いますが、私の状態を聞いて、『それは些か犬王だね』と言ったそうです。犬王とはオヘんに王、即ち狂を意味するのです。銀座など散歩して、二〇才前後の娘さんに行き合おうと、私は無意識にその娘さんに視線を奪われて、まわれ右までして、それをじっと見おくるのであります。(中略)私の脳裏にある澄子さんの姿が、行き会う娘さんの上に投影して、それが私の魂をひっさらうのであります(7)」と述べている。

また関東大震災後のことであるが、つぎのように回想している。

「澄子さんの家の前を通った。ところがその家は焼け出されて澄子さんの弟の名前で立札が出ていた。牛込河

田町に転居したということであった。(中略) この焼跡の家を見ただけで私はこの世の無常を感じざるを得なかった。私はヨーロッパ放浪中も肌身離さず持っていたものがある。それはかつての日澄子さんに貰った写真と手記とであった。が、この焼跡の家を見てから私はそういう記念物を保存するに忍びず、ついに焼き捨ててしまつた」⁽⁸⁾

このような恋の悩みは、キリスト教への傾倒をますます深くするものであった。そしてキリスト教信仰深化の中で、人類社会への献身という意識を大いに燃えあがらせた。彼はこの間の事情を、つぎのように述べている。

「私は前にも申しましたように、一五、六才の時から社会主義や無政府主義のことを教えられ、学生時代から新聞や雑誌に『ソーシヤリズム』を主張した文章を寄せたりしていました。しかし、本当に人類社会への献身と
言うことを教えられ、全我をそれに傾倒しようとする情熱を養われたのは全くキリスト教によってでした。海老名弾正氏の『新武士道』という説教などにはどの位感激せしめられたことでしょう。」⁽⁹⁾

まず生まれ育った家や自由民権運動の指導者たちとの交遊から影響を受けて社会主義に開眼し、ついでキリスト教によって人類社会への献身の意識をかきたてられ、さらに万朝報社で堺利彦・幸徳秋水らの薫陶を受けて、キリスト教社会主義者石川三四郎が形成されていったのであった。

(1) 石川三四郎『自叙伝』上巻(一九五六年、理論社刊)四六ページ。

(2) 同右、五〇ページ。

(3) 同右、五〇〜五一ページ。

- (4) 同右、五三ページ。
- (5) 石川旭山「基督教界の二大人物（内村氏と海老名氏）」、『平民新聞』第三号（明治三六年一月二十九日）。
- (6) 『自叙伝』上巻五三二ページ。
- (7) 同右、六七ページ。
- (8) 『自叙伝』下巻一〇九〜一一〇ページ。
- (9) 『自叙伝』上巻六三二ページ。

二 海老名弾正との対立

当時極東の国際的舞台では、日本とロシアとが朝鮮と満州のヘゲモニーをどちらがにぎるかをめぐる鋭く対立していた。国内は「ロシア討つべし」の世論にわきたっていたが、当時最大の発行部数を誇る『万朝報』では、内村鑑三・幸徳秋水・堺利彦らが非戦の論陣をはっていた。しかしながら開戦が不可避の形勢となるや、『万朝報』は主戦論に豹変してしまった。そこで幸徳秋水・堺利彦は一九〇三年（明治三六）一月一二日、つぎのような「退社の辞」を発表して、万朝報社を退社した。

「退社の辞」

予等二人は不幸にも対露問題に関して朝報紙と意見を異にするに至れり。

予等が平生社会主義の見地よりして、国際の戦争を目するに貴族、軍人間の私闘を以てし、国民の多数は其爲に犠牲に供せらるゝ者と爲すこと、読者諸君の既に久しく本紙上に於て見らるゝ所なるべし、然るに斯くの如く

予等の意見を寛容したる朝報紙も近日外交の時局切迫を覚ゆるに及び、戦争の終に避くべからざるかを思い、若し避くべからずとせば挙国一致当局を助けて盲進せざる可らずと為せること、是亦読者諸君の既に見らるゝ所なるべし。

此に於て予等は朝報社に在つて沈黙を守らざるを得ざるの地位に立てり、然れども永く沈黙して其所信を語らざるは、志士の社会に對する本分責任に於て欠くる所あるを覚ゆ、故に予等は止むを得ずして、退社を乞うに至れり。

予等の乞に對し、黒岩君は寛大義侠の心を以て切に勧告せらるゝ所ありたれども、事此に至りては亦如何ともすること能わず、予等は終に黒岩君其他社友の多年の好誼に背きて、一たび此に袂を分つに至れり。

但、朝報紙編輯の事以外に於て、永く従來の交情を持続せんことは、予等の深く希望したる所にして、又黒岩君其他の堅く誓約せられたる所なり。

敢て情を陳じて、読者諸君の諒察を仰ぐ。

堺 利彦

幸徳伝次郎

内村鑑三もまた同じ日の『万朝報』に、つぎのような「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」を發表して万朝報社を退社した。

「小生日露開戦に同意することを以て日本國の滅亡に同意すること、確信致し候。

然りとて国民挙て開戦と決する以上は之に反対するは情として小生の忍ぶ能わざる所に御座候。

然りとて又論者として世に立つ以上は確信を語らざるは志士の本分に反くことと存候。

殊に又た朝報にして開戦に同意する以上は（其意は小生の充分に諒とする所なれども）其紙上に於て反対の氣味を帯ぶる論文を掲ぐるは之れ亦小生の為すに忍びざる所にして、又朝報が世に信用を失うに至るの途と存候。茲に至て小生は止むを得ず、多くの辛らき情実を忍び、当分の間論壇より退くことに決心致し候間、小生の微意御諒察被下度候。

朝報に対する小生の好意は今日も前日と毫も異なる所無之候。」

内村鑑三が「当分の間論壇より退くことに決心」したのに反し、幸徳秋水と堺利彦は平民社を設立し、十一月五日『平民新聞』を創刊した。この『平民新聞』に、石川三四郎も馳せ参じたのであった。入社を辞す、石川はつぎのように述べた。

「予今平民社に入る、入らざるを得ざるもの存する也、何ぞや、曰く夫の主義ちやうものあり、夫の理想ちやうものあり、然りと雖も予の自ら禁する能わざるものは啻に是れのみ非ず、否寧ろ他に在て存する也、堺、幸徳、両先輩の心情即ち是れのみ、彼の南洲をして一寒僧と相抱きて海に投ぜしめしは是れに非ずや、彼の荆軻をして一太子の為に殉せしめしは是れに非ずや、徒らに理想と言う勿れ、主義と呼ぶ勿れ、吾は衷心天来の鼓吹を聞けり、曰く人生意氣に感ずと」⁽¹⁾

平民社は幸徳秋水と堺利彦、それに石川三四郎、そして一九〇四年早々に二六新報社を退社して加わった西川光

次郎の四人によって運営された。この平民社で、石川は社会主義と非戦論を一段と深めた。そしてそれは当然のことながら、海老名弾正との対立をひきおこした。海老名との対立は、まず日露戦争に対する態度においておこった。海老名は『新人』第五巻第四号において、「今や日本は軍国多難の時機、一国を挙げて戦争に熱中するの時に際し、大胆にも一派の論者は堂々として非戦主義を唱道しつゝあるを見る。是れ奇観なり。（中略）日本の社会が能く此等の論者を包容し得るは、慥かに其の健全なる發育を遂げつゝあるを証明するものとして、吾人は寧ろ此の奇異なる頭象を歓迎せんと欲するもの也。然るに此の非戦論者中には多くのクリスチャンあり。是れ頗る注目すべき事実にして、基督教は果して非戦主義を教ゆる者なるや否やは、此際に於て大に討究すべき好箇の問題なりと信ず。故に吾人は聊か聖書と、戦争との關係に就きて卑見を述ぶるところ有らんと欲す。主戦非戦何れが果して聖書の教訓なるか、請う吾人をして虚心平氣に之れが研究に従事せしめよ」と問題を設定した。⁽²⁾

この設問に対して、海老名は「最も公平なる眼光を以て先ず旧約聖書を繙き来らば、何人と雖も之が明かに戦争を是認するものなるを認めざるを得ざるべし。モーゼの五経を初めとして旧約聖書中の歴史の大部分は、概ね皆戦争史なり」と論じて、旧約聖書は戦争肯定であると答えた。⁽³⁾

それならば新約聖書はどうであろうか。これについて海老名は、つぎのように論じた。

「先ずかの洗礼のヨハネを見よ。当時ヨハネの許に来れる多くの人々の中に幾多の兵士ありき。此時ヨハネは彼等に向つて、汝等兵士たる勿れと教へたるか、曰く然らず、彼は只だ其の貪婪暴行を戒しめたるのみ。斯くの如く軍人たる百人の長も亦たイエスを慕うて之に従えり。其時イエスは汝宜しく軍人たるの職を罷めよと命ぜしや、曰く否な。使徒行伝に於ては羅馬の軍人にして洗礼を受けたる者あり。而してペテロは毫も之を禁ぜざりし

のみならず、使徒時代には幾多の軍人にしてクリスチャンたりし者之れあるを見るなり、之を以て之を見れば新約聖書は徹頭徹尾信徒の軍人たるを禁じたる事あるなし。若しも新約聖書にして全然非戦論を教ゆる者ならば、必ずや明かに之を嚴禁するところ無かる可からず。而かも吾人は之を発見する能わざるなり。

夫れ然り、然りと雖も是れ単に文字の上に顯われたる新約聖書の解釈たるに過ぎず、一たび皮相の見を脱して深くキリストの精神に透徹し来りて之を見れば、彼は純然たる非戦論者には非りしか。曰く人若し汝の右の頬を打たば左の頬をも転らして之に向けよ、曰く人若し一里の公役を強いなば之と偕に二里行け、曰く汝の敵を愛し虐め責むる者のために祈禱せよと、是れ明かに無抵抗主義の道徳を主張する者なり。パウロも亦た教えて曰く、仇を復すは神に在り、故に予の敵飢えなば之に食を与え、渴かば之に水を与えよと、是れ熱火を其の頭に積むなりと。乃ち知る新約聖書は其の精神的の方面に於ては、飽まで非戦主義を教ゆるものなるを。是に於てか吾人は基督の教訓に於て二箇の正反對なる方面あるが如きの感なき能わず、即ち一方に於ては毫も戦争を否認することなく、他の一方に於ては極端に之を否認するが如きものある是れなり。」⁽⁴⁾

それでは新約聖書の一面戦争肯定、一面戦争否定の矛盾をどう解釈すべきであろうか。この点について、海老名はつぎのように論じた。

「イスラエル民族は其の興国の時代に於ては飽まで侵略的の戦争国家なりしが、一たび亡国の悲運に陥るに及んでや、爰に専ら宗教道徳に頼るのほかに途なきを覚悟するに至りぬ。(中略)

イエスキリストは実に此時に於て生れし也。彼れの使命は果して如何。彼は興国のメッサヤとして其使命を果

さんとせしか、曰く否な。彼れの慧眼は早くも政治的興国の絶望なるを見たり。ユダヤ民族の国家としての生存に關して彼は明かに断念せしなり。イエスの神国は即ち政治的の國家にあらず、靈的王国たる精神的の団体たるなり。彼は実に之を建設せんと企てたりき。（中略）

借問す、神国の建設には果して干戈を要するか。曰く否な、神国は愛の國なり、真理の國なり、之を建設するの道は只だ愛と真理とあるのみ、又た何ぞ干戈を要せんや。（中略）

然らば則ち基督は國家を無視したる乎、家庭を無視したる乎。曰く否な、彼は此等の組織の中に所謂の神國を建設せんと欲せしなり。神國は單に抽象的理想として存在すべきにあらず、凡ての個人的生活の中に、又凡ての家庭の中に、民族の中に、國家の中に、事實として表現し來らざる可らず。（中略）

然るに此の神聖なる國家民族家庭を造り又た之を維持せんが爲めには、干戈は実に一日として欠く可からざる者なり（中略）是れキリストの明知せるところにして又た其の戰爭を禁せざりし所以なり。⁽⁵⁾」

すなわち靈的王国には戰爭否定、政治的國家には戰爭肯定という二元論で、海老名はこの難問を解決したのであった。したがって「彼の妄りに戰爭の悲惨を厭うて非戰論を唱うる者、未だ以て基督の精神を解する能わざる者也」⁽⁶⁾としたのである。

このような強い信仰上の確信に立つて、海老名は現実の日露戰爭を積極的に肯定した。海老名は『新人』の同じ号で、日本は文明主義・人道主義の立場からロシアと戦っているのであつて、「日軍の勝利は則ち文明の勝利なり、人道の勝利なり。誰れか之を祝せざらんや」⁽⁷⁾とした。

石川はこのような海老名と対極の立場に位置していた。石川は「政界の腐敗に次で万民の墮落は來りしに非ずや、

産業の萎靡田園の荒蕪、飢餓の悲鳴は起りしに非ずや、然も万民愚にして其罪を覺らず、暴動は日々に猛烈を極む、日露の鬭争は実に其極度に於て激発せられたり、列國は悉く武装して立てり、國民の危惧は益々高まれり、社会の動搖は根底より起れり、而して会々憂世の士あり、切に狂瀾を既倒に回らさんことを説くや、威力忽ち來つて之を襲う、嗚呼キリスト、イエスが告げたりし『末の兆』は得て尽されたらずや」と、日露戦争に「最末の兆」を見たのである。

また海老名が、「勇敢の氣象、胆力、義氣、献身等の尊き精神は、最もよく戦争の中に發揮せられるではないか」として「戦争の美」を強調したのに反し、石川は「仮令戦争にして正義に非ずとするも、寧ろ罪惡なりとするも、而も一身を捧げて此大事に當る、犠牲の精神の熱烈なる發現なりと言わずんば非らず、世の所謂有識者が以て最大の教訓となす、蓋し之を言うならん、然り是れ一種の犠牲なり、人情の美趣又た多く此の間に現れる、然れども斯くの如き精神や、彼の熊と八との間に於て、彼の所謂江戸ッ子の間に於て、彼の所謂俠客の仲間に於て、既に發達せる所なり、美は即ち美なりと雖ども尠くとも人情の最も偏狹なるものとせざるを得ず、世の教導を以て任ずるもの、寧ろ戒しめて以て矯正すべき也」と、これを強く否定したのである。

しかしながら日露戦争をめぐるこのような対立が、二人の訣別をもたらしはしなかつた。この点では大杉栄・海老名弾正の關係と対照的であつた。大杉は新しい進歩思想を求めてあちこちの教会の扉をたたいたが、下宿から一番近くてまた説教の一番氣にいった海老名弾正の本郷教会にはいった。そしてついに海老名から洗礼を受けたのであるが、その時は「その注がれる水がよく浸みこむようにと思つて、わざわざ頭を一厘がりに行つて、コップの水を受けた」⁽¹¹⁾ほどであつた。

ところが本郷教会における石川の後輩とも言うべき大杉は、先輩とは大いに態度が違っていた。大杉はつぎのように述べている。

「戦争に対する宗教家の態度、ことに僕が信じていた海老名弾正の態度はことごとく僕のこの信仰を裏切った。海老名弾正の国家主義的大和魂的キリスト教が、僕の目にはつきりと映ってきた。戦勝祈禱会をやる。軍歌のような讚美歌を歌わせる。忠君愛国のお説教をする。『われは平和をもたらさんぐためにきたれるに非ず。』というようなキリストの言葉をとんでもないところへ引合いに出す。僕はあきれかえってしまった。そして、海老名弾正だの、当時よくトルストイ物を翻訳していた加藤直士だのと数回議論をしたあとで、すっかり教会を見かぎってしまった。そしてまた同時にうっかりはいりかけた『右の頬を打たれたら左の頬を出せ』という宗教の本質の無抵抗主義にも疑いを持って、階級闘争の純然たる社会主義にはいることができた。⁽¹²⁾」

石川は、どうして大杉のように海老名から離れなかったのであろうか。それは大杉より信仰が深かったから、大杉より海老名との結びつきが深かったからであろう。石川が日露戦争について明白に師海老名と対立するようになってからずっと後の一九〇五年（明治三八）七月の時点においても、石川は「予は未熟ながら常に自ら海老名門下の末弟なりとなす者なり否な先生を思うては常に『愛に充てる敵父！』ちよう感情の起らざること無きなり。而して予は、近時の時事問題に関して少からず先生と所見を異にせりと雖ども（元より細末の事と予自ら信ずる部分に於て）而も此感情に至りては未だ曾て変らざりき⁽¹³⁾」と書くことができたのである。

石川が海老名と感情的にもやや疎遠になるほど対立したのは、日露戦争をめぐるのではなく、自由恋愛論をめぐる

つてであつた。石川は自由恋愛論者であつた。自由恋愛とは、石川によれば「総ての男女が好むに従つて相愛し、好いた同志が同棲すること自由なる……故に結婚なくして夫妻として生活し、離婚なくして思うまゝに相分れ、而して何等の汚辱、責任を受くること無く、自由に他の配偶者を選ぶこと」⁽¹⁴⁾であつた。

このような自由恋愛論を、石川は「自由恋愛私見」として『平民新聞』紙上に発表した。読者の間にがぜん物議をかもした。騒ぎをさずめるために堺利彦が筆をとり、「自由恋愛と社会主義」を発表した。堺は、社会主義実現の暁には女子も男子に対して経済上の独立を得、いきおい男女関係にも大変化がもたらされるに違いない、しかしながら社会主義はいまだかつて将来における一定の男女関係を予想したこともないし、ましてや社会主義と自由恋愛論の間には何の直接的な関係もないと説いた。そして最後に堺は、社会主義者にしてこの問題を説く者は、世の誤解をさけるため、言動に特に注意せねばならないとした。かくして騒ぎもおさまつた。

ところが自説を固持する石川三四郎は、このような自由恋愛論を本郷教会で説教したからたまらない。その時のことを、石川はつぎのように述べている。

「私は本郷教会の日曜日の夜の伝道説教に右の論文と同じような演説を試みました。その日の朝の海老名弾正先生の説教が『貞操論』であつたに対して、私の話は正反對のものであります。(中略)いつも私の説教の後に先生が立つて握手をしてくれるのに、その時にはそれがありませんでした。はつと気が付いた時、先生は内ヶ崎君に耳うちし、直に内ヶ崎君が演壇に立つて私の自由恋愛論を反駁するのです。成程私は海老名先生の朝の説教を反駁した事になったのだ、と気がつきました。格別悪気があつたわけではなく、私の個人的な強烈な要求を圧え得なかつたためなのですが、その後私は同教会と縁が切れてしまいました。⁽¹⁵⁾」

それでは石川が反駁したことになった海老名の貞操論とは、どのようなものであったらうか。『新人』第六巻第四号に発表された「貞操論」によれば、要約するとそれはつぎのようなものであった。

我々は今新しい時代にはいつたが、我々の祖先はまったく異なる二つの時代を経過してきた。すなわち平安時代と徳川時代である。平安時代は我国における男女交際の時代であったが、徳川時代はその正反対であった。そして今迎えている現代は、なお過渡時代である。なぜならば理想的状态たる男女雑居が生活のあらゆる面に及ばずして、家庭のみに限られているからである。理想生活たる男女雑居を実現するのに不可欠なのが貞操である。貞操さえ確立すれば、男女室を異にし、席を別にして、男女雑居を家庭にかぎる必要はないのである。

このような海老名の貞操論からすれば、石川の自由恋愛論は許されるものではなかった。しかしだからと言って、これを契機に石川と教会の縁がぎれてしまったのではなかった。石川の『自叙伝』の記述は、彼の記憶違いである。この事件があつてから一年以上後にも、彼が本郷教会で説教していることが記録に残っているからである。しかし彼と教会の間、あるいは彼と海老名の間が、以前ほど感情的にしつくりいなくなつたことは確かである。

石川三四郎が海老名と対立した第三の点は、社会主義とキリスト教の関係をめぐるものであった。周知のように日本の社会主義運動は、当初キリスト教徒によって担われた。社会主義研究会・協会の会長はキリスト教社会主義者の村井知至と安部磯雄であつたし、社会民主党の創立メンバーは、唯物論者の幸徳秋水を除いて安部磯雄・片山潜・木下尚江・西川光次郎・河上清の五名がクリスチャンであつた。唯物論者の幸徳秋水・堺利彦によって設立された平民社に集まる若き社会主義者の大半はクリスチャンであつた。このような状況を背景にして、石川は『平民新

聞」第五〇号（明治三七年一〇月二三日）に発表した「基督教徒に告ぐ」において、「カトリックと言わず、プロテスタントと言わず、総ての教会が彼の如く無勢力となれるは何に因るや、他あらず、彼等は憐れむべき貧者を救うべき現世の大使命を忘却したればなり、又た彼等は徒らに無益なる神学上の争論にのみ身を委ね、現在社会の活問題に対して極めて無智なればなり」と、また『平民新聞』第六一号（明治三八年一月八日）に発表した「革命の斧『再び基督教徒に告ぐ』」においては、「諸君若しバプテスマのヨハネを愛し、ナザレのエスを慕わば、何ぞ速かに革命の斧を掲げて我が社会主義に來らざるや」と、キリスト教徒に社会主義運動への参加を訴えた。

石川は社会主義運動への参加を、本郷教会の説教においても説いた。「クリスチャン活動の新方面」と題した説教において、彼は要約つぎのように説いた。

一六世紀から一九世紀にいたる近代の歴史は自由の発展の歴史である。その自由の発展は宗教に始まって政治に終わり、立憲代議制が完成した。そして第一の封建制度を打破し、この自由の発展をもたらしたものとそくりスチャンであった。ところが今資本主義の発展に伴って新たな第二の封建制度が生まれてきている。この第二の封建制度打破こそ、第一の封建制度を打破したクリスチャンの活動の新方面でなければならぬ。

このように述べた石川は、さらに「諸君は常に海老名先生の奮闘主義の説教を聞き、而して又た眼前に夫の悲境に沈淪する多くの同胞を見るの時諸君は独り退いて晏如たることを得るや（中略）嗚呼諸君、クリスチャン活動の部面は今新たに諸君の眼前に開展しつゝあり、何ぞ速かに蹶起して此に其一身を投ぜざる」¹⁶と、社会主義の戦列への参加を熱烈に呼びかけたのであった。

周知のように当時の思想界において、社会主義とキリスト教の関係は一大テーマであった。そして教会の中でも「社会主義に対し如何なる態度をとるべきか」が問われるようになり、キリスト教界の一方の指導者として海老名もこの問題を不問に付すわけにはいかなくなり、一九〇五年(明治三八)七月二日、本郷教会の説教において、「社会主義と基督教」と題してこの問題の解釈を試みた。

この海老名の説教の詳細は分らないが、石川の記憶にもとづく紹介によれば、要点はつぎのようなものであった。

「△人類は皆な同胞なり。同胞が平等に相愛し、幸福を共にせんとするの思想は基督教と社会主義と一致する所也。

△基督教は心霊の事を言い、社会主義は物質の事を論ず。両者の異なる第一点なり。

△基督教は宗教にして、社会主義は政治論なり。前者は精神の改革を計り、後者は社会組織の改革を目的とす。

両者の異なる第二点なり。

△要するに、基督教と社会主義とは、各々別途の方針あり。さればとて両者は相反する者に非ず。寧ろ相助け行きて始めて其の目的を完成すべき也。

△此の他、『社会の改革、社会の指導を以て任ずる宗教家は、到底、かゝる世界の大勢力たる社会問題に接触せざるを得ず』と言えるが如き、『基督教徒が神意を体して此の社会運動に身を投ずる、何の不可か之あらん』、

『此の地上の運動に天来の鼓吹を入れてこそ、始めて之れが生命あるものとなり、永遠の事業ともなりぬべきなり』と説かれしが如き、総て之れ吾人の平生主張せる所なりと雖ども、而も新たなる鼓吹の我が衷心を打てるを

覺えたりき。蓋し殆んど総ての基督教の先輩が、卑怯にも一言、社会主義の名にすら及ぶ無きの時に当りて、独り先生の此の説あるに接したれば也。⁽¹⁷⁾

この海老名の「社会主義と基督教」は、石川も、「其の言う所、概ね能く公平を保ち、吾人をして衷心より合点せしむるもの多かりき」⁽¹⁸⁾と述べたように、社会主義者から歓迎された。ところがあにはからんや、社会主義者の歓迎は誤解に基づくものだとして、海老名は「『社会主義に對し吾人基督教徒の当さに執るべき真態度』に關し、最も明白なる宣明を為すの必要を認め」、⁽¹⁹⁾『新人』第六卷第九号（明治三八年九月）誌上に「社会主義と基督教」なる論文を發表したのである。

海老名は四点にわたって、「社会主義と基督教」の關係を明らかにした。まず第一にキリスト教徒は社会問題の存在とその解決の急務を主張する点において社会主義者と同じであり、「従来の基督教徒が此方面に力を致すことの極めて薄かったことを自白し、社会主義者が最も熱心に、否誰人よりも熱心に此方面に死力を竭されたことを心から感謝するものである」⁽²⁰⁾とした。第二に、しかしながら社会問題解決の急務を説くことは決して社会主義にはならないとした。すなわち社会問題と社会主義とは、おのずと別の問題だからである。第三にキリスト教徒は、私有財産制度の廢滅をもって社会問題の根本的最終的解決法とは考えない。なぜならば、社会問題をひきおこした原因には、内的原因として「潔められざる心」⁽²¹⁾と外的原因として「此汚れたる心に依りて悪用せらるゝ社会の組織」⁽²²⁾があるが、そのうちいずれがより根本的かというところ「潔められざる心」であるからである。したがって「基督教徒は神より賜りたる伝道の聖業がまた同時に社会問題解決の根本方法たるを想いて、益々專一に之を奮わねばならぬ。之と同時にまた応急的救済策として社会組織の改革に志すも基督教徒として決して不適當の事では無い。が併しド

「こまでも『伝道』と言うことが根本であることを忘れてはならないのである。」⁽²³⁾

第四に、社会主義者が社会組織の改革をもって社会問題解決の唯一根本の方策とするならば、それは誤りであり、キリスト教の信仰と相容れないものである。この点について、海老名はつぎのように述べた。

「若し社会組織と言う外部の条件が罪惡の唯一の原因であり、社会組織が改善せられては人心は到底善に移るものでない、猶を露骨に言うならば、人性の善惡は全く其物質的生活の状態によりて決せらるゝと言うならば、人は即ち境遇の奴隸、物質の奴隸であつて、吾人の生活は決して夫の動物の生活と異ならぬのである。併し乍ら、読者諸君、人はすべて神の子である、生れ乍らにして神の心を体して居るものである。而して又万物の靈長であると言うことは基督教の信仰では無い。人は本来境遇を支配すべきものである。物質を統御すべきものである、と言うのが吾等の最も大切な信条ではあるまいか。(中略) 要するに罪惡の唯一の原因を社会組織に帰する、従つて社会組織の改革を以て社会問題解決の唯一根本の方法となすの説の根底は唯物主義である。決して靈性の權威を信ずる基督教と両立すべきもので無い」⁽²⁴⁾

要するに社会主義が社会組織の改革をもつて唯一根本的な方法ではないと言えばキリスト教と両立するが、これに反して唯一根本的な方法であると言えば全然両立できないのであり、キリスト教徒にして社会主義者であると称する者はすべからず前者でなければならぬとしたのである。そして「今日我国の社会主義者中には一方に木下君石川君の如き篤信の基督教徒であると共に、他方には明白に宗教の価値を否認する幸徳君の如きあるを見れば、吾人は所謂社会主義者と言う中にも、右の如き根本思想の丸で違つた二種の者が存すると言うことを認めざるを得ぬ。

去るにてもイブかしきはこの丸で根本思想の違つた者が、同じく社会主義なる同一名目の下に運動を共にして居ることである」⁽²⁵⁾と結んだのであつた。

この論文は社会主義とキリスト教の同よりも異を立てることに主眼が置かれているかのようであるが、おそらくはこの論文に先だつ説教の波紋を打ち消すのに目的があつたのであらう。しかし、いずれにしても海老名が積極的に「社会主義と基督教」の関係を論じ、社会問題解決にとりくまねばならないことを強調したこと、及びこの点では社会主義と共通点があることを指摘したことの意味は大きく、後に海老名の門下から大正デモクラシー運動の担い手が出るようになったのも、社会問題や社会主義に対する海老名のこのような積極的な姿勢によるのである。

さらにこの論文の結びの、キリスト教社会主義者と唯物論派社会主義者がただ社会主義という言葉が同じだからといって同一の陣営に属しているのはいぶかしいといった指摘は、平民社解散後の『光』と『新紀元』とへの社会主義運動の分裂を暗示するものであつた。

- (1) 石川旭山「予、平民社に入る」『平民新聞』第三号（明治三十六年一月二十九日）。
- (2) 海老名弾正「聖書の戦争主義」『新人』第五卷第四号（明治三十七年四月一日）五〇六ページ。
- (3) (4) 同右、六ページ。
- (5) 同右、八〇九ページ。
- (6) 同右、一一ページ。
- (7) 「人道の見地より見たる日露戦争」『新人』第五卷第四号四ページ。本論文は無署名の社説であるが、海老名の執筆と思われる。
- (8) 石川「最末の兆」『平民新聞』第二八号（明治三十七年五月二二日）。
- (9) 海老名弾正「戦争の美」『新人』第五卷第八号（明治三十七年八月一日）一八ページ。

- (10) 石川「所謂犠牲の精神」『平民新聞』第三二号（明治三十七年六月一九日）。
- (11) 大杉栄『自叙伝・日本脱出記』（一九七一年、岩波書店刊）一六九ページ。
- (12) 同右、一七七〜一七八ページ。
- (13) 石川「七月二日の本郷教会」『直言』第二卷第三号（明治三十八年七月九日）。
- (14) 石川「自由恋愛私見」『平民新聞』第四五号（明治三十七年九月一八日）。
- (15) 石川『自叙伝』上巻六五〜六六ページ。
- (16) 石川「クリスチャン活動の新方面」『直言』第二卷第一六号（明治三十八年五月二一日）。
- (17) 石川「七月二日の本郷教会」『直言』第二卷第三号（明治三十八年七月九日）。
- (18) 同右。
- (19)(20) 「社会主義と基督教」『新人』第六卷第九号（明治三十八年九月一日）七ページ。本論文は無署名であるが、海老名の執筆巻と思われる吉野作造が執筆した可能性もあるが、その場合でも海老名の意を体してであったと思われる。（小山東助「新人一〇年史の断片」『新人』第一一巻第一〇号参照）。
- (21)(22) 同右、九ページ。
- (23) 同右、九〜一〇ページ。
- (24)(25) 同右、一一ページ。

三 『新紀元』

『平民新聞』に引続いて『直言』を発行して非戦と社会主義を唱え続けた平民社は、いわゆる日比谷焼打事件の余波の中で解散を余儀なくされた。すなわち日露講和条約に憤激した一九〇五年（明治三八）九月五日の日比谷焼

打事件の後、政府は戒嚴令をしき、『朝日新聞』・『万朝報』・『二六新報』などの各新聞に発行停止を命じた。「彼等の諸君に対する怨恨は講和の条件に依て醸成せられたるに非ずして、其の強いて抑え来れる怨恨の、戦争終結を待つて破裂爆發したりしのみ」と政府の猛省を促した『直言』もまた発行停止を命ぜられ、いつその発行停止が解除になるのか、その見通しもたまたなかつた。このような時に、九月二十六日西川光次郎が出獄してきた。そして幸徳秋水・堺利彦・木下尚江・石川三四郎・西川光次郎が協議して、『直言』の廃刊と平民社の解散を決定したのであった。

平民社を解散してみると、他の同人たちは身のふり方が決まっているのに、決まらぬのは石川三四郎唯一人であった。どうしようか、どうしようか、と話し合っているうちに、木下尚江が沈黙をやぶって、「『旭山！大いにヤレよ』と言う。ヤレと言うた所で、何をヤルのかね、下宿屋でもヤロウかと問えば『イヤそうでは無い、雑誌を発行しないか、クリスチャン・ソーシアリズムのを……』と答⁽²⁾えた。その翌々日安部磯雄に助力を請うと、この計画を非常に喜び、編集上の責任をも分担する旨の申し出がなされ、さらに徳富蘆花・田添鉄二も協力を誓った。かくして新紀元社が設立され、キリスト教社会主義の月刊雑誌『新紀元』が、一九〇五年十一月一〇日に創刊されたのであった。一方唯物論派の西川光次郎らは、二〇日には半月刊紙『光』を発行した。唯物論派社会主義者とキリスト教社会主義者の二大潮流が、日露戦争反対という一点で小異を捨てて大同についていたものが、日露戦争の終了とともに別の道を歩むことになったのである。海老名弾正の指摘があつたようであつた。

『新紀元』という名前は、どういう意味であろうか。この点について、石川はつぎのように述べている。

「三千年の歴史を累積し来れる世界の文明は、今や新に一新紀元を刻して人類史上に大光輝を放たんとす。而

して既に新紀元と言う、茲に新たな一大精神の存する無きを得んや。抑も一大精神とは何ぞや、曰く社会的理想なり、曰く義務の觀念なり、曰く愛の衷情なり。然り此の『愛』と『義務』と『社会』とは、即ち新紀元の新題目⁽³⁾をたらざる可らず。」

「宇宙の真理は、人心の奥底に動けり。絶大の光明は、天の一方に顕現せり。大覚醒は来りぬ。大運動は起りぬ。同胞相愛、万民平等の精神に充てる我が社会主義即ち是なり。」⁽⁴⁾

このような『新紀元』においては、安部が社説・論説・研究論文などを書き、木下が社説・時事評論などを書いたのに対し、石川もまた社説・論説・研究論文などを書いたが、編集の事務を一手に引き受けた。

ところで桂内閣は国民怨嗟のうちに倒れ、一九〇六年（明治三九）一月七日、西園寺内閣が成立した。社会主義者たちは、桂内閣とは異なつた西園寺内閣の自由主義的な態度を見て、久し振りに政党結成の試みをした。まず西川光次郎・樋口伝の二名が、一月一四日、「普通選挙の期成をはかるを目的とす」る日本平民党の結社届を出して受理され、ついで堺利彦・深尾韶の両名が日本社会党の結社届を出して許可された。両党は二月二四日に合同して、「国法の範囲内に於て、社会主義を主張す」る日本社会党を結成し、社会民主党禁止以来五年目にして社会主義の政党がここに誕生したのである。

日本社会党の結成によって社会主義運動が新段階を画しつつあった時、石川三四郎は『新紀元』誌上に「階級競争論」を発表した。要旨はつぎの如きものであった。

「一切社会の歴史は階級闘争の歴史也」とは、カール・マルクスが世界史上に高く点じた大光明であるが、一

利ある所には必ず一害がある。すなわち社会が労働者階級と資本家階級とに分割されつつあることは明白な事実であるが、社会の改革にあたらんとする者は、一方に味方して他方に敵対してはいけない。資本主義制度を打破するのも、ひつきようするに、労働者階級のみならず資本家階級をも救うためである。社会主義は徹頭徹尾同胞相愛の人情に基づくものであつて、階級戦争のために存在するのではない。もし社会主義者が運動の成功を急いで労働者の利欲を挑発し、ことさら階級憎悪の念を助長すれば、運動はついに盲動に終わるにちがいない。

このような石川の「階級戦争論」に対して、堺利彦は『光』に「階級戦争論に就て」を発表して、つぎのように反論した。

「労働者の覚醒を促さんが為に、其利害に訴うるは固より当然の事である。石川君は殊に之を利欲と呼びて、サモ浅ましき者の如く書いて居るが、利欲と言うも、利益と言うも、利害と言うも、結局大差は無いのである。

(中略)

石川君は又『階級憎悪の念』を甚だしく忌むべきものとして居るが、悪制度を憎み、悪組織を憎むのが、何故に爾く忌むべきであるか。我々は今社会の階級相対立し、階級相反目し、階級相嫉視し、階級相闘争し、階級相殺傷するの实状を、成るべく赤裸々に露出して、平民労働者（及び上流階級の有志者）をして成るべく早く其非を覚らしめたいのである。此の悪制度、悪組織を憎むの念をして、少しでも深く、少しでも強くあらしめたいと思ふのである。然らずんば大改革、大革命の力は何処からも生じて来ぬのである。

但だ、悪制度、悪組織を憎むの余り、敵の階級に属する個人を憎怨するに至るは、是れ固より喜ぶべき事では

ない。石川君の氣にする所は蓋し是ではあるまいか。然しながら實際に於ては是れも亦止むを得ぬ次第である。労働者が敵の階級（即ち組織）を憎んで之を亡ぼさんとする時、敵は亦た自ら衛らんが為に労働者を攻撃驅逐する。此に於て労働者は其の憎惡する階級の維持者、防衛者、擁護者に対し、亦た憎惡の念を抱くは実に自然の事である。」⁽⁵⁾

そして堺は、石川がこのような現実を直視するのがいやなら、政治の世界には足を踏み入れず説教なり講演なりに惠念せよと説き、もし政治の世界に足を踏み入れてなかつ階級憎惡の念を滅せんといつとめるならば、それは明らかに矛盾撞着であると鋭く批判したのである。さらに最後に堺は、「此に於て予は思う。石川君等は其境遇、其氣質の上よりして、今暫く此矛盾の上に立って居るが、必ず遠からずして實際世界の眞の形勢を看取し、最早些々たる感情に拘泥するの違あらずして、猛然起つて濁浪の中に投ずるの時があるであらう。其時吾人は共に相携えて日本社会党の大傘の下に立つてであらう」という予言的な文句で、批判文を結んだのである。

石川は「堺兄に答う」でもって、このような堺の批判に対して答えた。その中で石川はつぎのように述べた。

「予は社会主義を実現する方法に二つの方面があると思う、一つは改革（又は革命）運動で、他の一つは伝道（又は教育）運動である。（中略）

予は伝道者たる態度を以て立ちたいと願うものである、而して此の態度を以て立たんことを希望する余は、ドウしても『労働者の私欲』^{（モラライツ）}を絶叫するに忍びないのである。（中略）

予はドウしても組織の変更と精神の改革とが平行せんことを希わずしては居られんのである。」⁽⁷⁾

石川は社会組織の改革と精神の改革が平行して行なわれる必要性を説き、自らは伝道精神の改革に従事することを宣言したことは、海老名弾正が「社会主義と基督教」で行なった批判をうけられたといえる。海老名が「社会主義と基督教」を発表した頃の石川は、まだ社会組織の改革の方をより重視し、それへのクリスチャンの参加を呼びかけていたのであるが、今や精神の改革の方を重視するようになったのである。

さてこの頃堺利彦は、石川三四郎に日本社会党入党をしきりにすすめていた。木下尚江もすでに入党しており、万朝報社・平民社で同じ釜の飯をくった石川が入党すれば、唯物論派社会主義者とキリスト教社会主義者の大同団結が達成されるからであった。しかしながら石川は「堺兄に与えて政党を論ず」を発表して、日本社会党入党の勤めをこわった。理由とするところは、政党なるものが「新たに改革の元気を人民の中に奮興する所以の道に非ずして、寧ろ既に奮起せる人心を寛和統率するの一段に過ぎず」、⁽⁸⁾「由来政党は小才子、俗物が、世話、奔走、応接の間に於て胡麻を摺るに宜しき所」⁽⁹⁾であり、「政党を以て、社会改革の手段として、左程重要なものと考」⁽¹⁰⁾えることができなかつたからである。このような政党活動に対して、「伝道の一事業は決して才子俗物の能くする処にあらざる也。唯だ熱誠にある也。唯だ真面目にある也。予は、今日の日本は尚お伝道の時代なるを信ず」⁽¹¹⁾として、石川は伝道活動、具体的には『新紀元』の事業に従事する旨を表明したのである。

石川が『新紀元』において一貫してとりくんだものに、足尾鋳毒事件及びその結末としての谷中村事件があった。石川は『新紀元』第一一号に「紳士泰平を誣い平民剣を磨く」を発表したが、これは谷中村訪問記であり、田中正造の近況を紹介する文章であった。石川は田中正造の驥尾に付して運動に奔走した。そのありさまを見た木下尚江は、「旭山は翁に対しては殆ど駄々児のように親しんでいた」⁽¹²⁾と述べている。石川をはじめ新紀元社の人々が谷

中村事件にとりくんだのは、『光』系の人々が谷中村を黙殺したのと対照的であった。この運動の中で石川は田中正造の偉大な人格に触れて、「人間というものが、どんなに輝いた魂を宿しているものか、どんなに高大な姿に成長し得るものか、ということを目前に示されて、感激せしめられた」⁽¹³⁾のである。

新紀元社は毎週日曜説教を行ない、隔週に聖書研究会を行なった。聖書研究会は、石川が後に「過去一年間に於ける最大の事業は実に聖書の研究である」⁽¹⁴⁾と述べるようになるのであるが、この聖書研究会には毎回青年男女五、六名が出席していた。その青年男女が中堅になって、新紀元社の運動を担ったのである。

さて一九〇六年（明治三九）一〇月二五日発行の『光』第二五号は、一つの驚くべき発表をした。翌年一月中旬を期して平民社が再建され、日刊紙『平民新聞』が発刊されるというのである。日刊新聞発行に伴い、当然のことながら『光』は廃刊になる。一方キリスト教社会主義の『新紀元』の方であるが、木下尚江は同年五月の母の死が契機となり思想的転換をおこし、キリスト教と社会主義という二人の主君に仕えることはできないとして、社会主義を捨て伊香保の山中に隠れていたが、安部磯雄は進んで日刊『平民新聞』を応援する態度を示した。ところで石川三四郎であるが、彼は平民社の再興である上に、「従来何とは無しに対立の形勢を為せる基督教徒、非基督教徒の両派の社会主義者が相融和する」⁽¹⁵⁾としてこれに加わることにした。『新紀元』の方は木下に経営してもらった安部が提案したが容れられず、ここに第一三号を最後として廃刊されることになったのである。

- (1) 「政府の猛省を促す」『直言』第二卷第三二号（明治三十八年九月一〇日）。
- (2) 石川旭山「本誌発行に就ての所感」『新紀元』第一号（明治三十八年一月一〇日）。
- (3)(4) 石川「新紀元の新題目」『新紀元』第一号。

- (5) (6) 堺利彦「階級戦争論に就て——山路愛山君と石川三四郎に質す——」『光』第一四号(明治三十九年六月五日)。
- (7) 石川「堺兄に答う(『光』第一四号「階級戦争論に就て」に答う)」『新紀元』第九号(明治三十九年七月一〇日)。
- (8) (9) (10) (11) 石川「堺兄に与えて政党を論ず」『新紀元』第一〇号(明治三十九年八月一〇日)。
- (12) 石川『自叙伝』上巻一一六ページ。
- (13) 同右、一〇七ページ。
- (14) 石川「回顧一年」『新紀元』第二三号(明治三十九年十一月一〇日)。
- (15) 石川「廢刊事情」『新紀元』第二三号。

四 日刊『平民新聞』

日刊『平民新聞』は、堺利彦・幸徳秋水・石川三四郎・西川光次郎・竹内兼七を創立人として、一九〇七年(明治四〇)一月一五日に創刊された。石川はこの日刊『平民新聞』の発行人兼編集人であった。日本社会党は、当時世界でも珍しい日刊機関紙を持つことによって、その前途は洋々たるかに見えた。ところが幸徳秋水の直接行動論提唱によって、直接行動か議会政策かの大論争が日刊『平民新聞』紙上に展開され、社会主義運動は一大暴風雨にみまわれることになった。

まず幸徳秋水が、「余は正直に告白する、余が社会主義運動の手段方針に関する意見は、一昨年の入獄当時より少しく変じ、更に昨年の旅行に於て大に變じ、今や数年以前を顧みれば、我ながら殆ど別人の感がある(中略)故に余は正直に告白する、『彼の普通選挙や議会政策では真個の社会的革命を成遂げることとは到底出来ぬ、社会主義

の目的を達するには、一に團結せる労働者の直接行動(デレクト、アクション)に依るの外はない』、余が現時の思想は実に如此くである」と直接行動論を唱えた。

すると日本社会党の最高幹部堺利彦は、幸徳がアメリカから帰国以来ほとんど毎日のごとく幸徳とこの問題を激しく論じたが、両者の差は「只議會政策を全然否認するのと、之を併せ用いるのとの差であ」り、「予は、今後社会主義運動の大方針としては、一方には議會政策を取り、一方には労働者の團結を計り、議會内と一般社会と常に相呼応して平民階級全体の活動を勉るに在るかと思ふ」と折衷的な併用論の立場を明らかにした。

ところが続いて論陣を張った田添鉄二は、「今日まで社会改革に志す人々の往々陥り易き短所は、社会の革命を以て、一活劇の下に実現し得るという思想である」と直接行動派の革命觀を否定し、「予は飽までも日本社会党運動の常道として左の方針をとりたいと思ふ」として、つぎのような具体的方針を提起した。

「一、平民階級の教育……階級的自覚の喚起

二、平民階級の経済的團結運動

三、平民階級の政治的團結運動

四、議會政策」

このように直接行動派・中間派・議會政策派の理論的指導者が見解を発表すると、賛否の論争は大きく渦巻き、二月一七日に開催される日本社会党第二回大会を目前にして、対立はますます激化していった。石川三四郎は日本社会党に加入していなかったにもかかわらず、このような事態を非常に心配して、一六日にはつぎのような

「社会黨員に告ぐ」を發表した。

「抑も社会主義は社会の根本的改革を目的とするの原理に非ずや。予は、此の目的を懐いて成立せる日本社会党は先づ自ら旧来の政党組織より超脱して一新生面を開くの要あるべしと信ず。社会主義は大なる理想なり。此の大なる理想を実現せんとする、其手段方法や自ら複雑ならざる可らず。而も人各々其力に限りあり、人各々其性癖と才能とを異にす。而して其複雑なる手段は、各人の好む所、才能の適する所に従つて分担せられざる可からず。議会政策に興味を有するものは皆協力して普通選挙の運動を為すべし、直接行動を可とするものは皆一致して労働組合運動に尽瘁すべし、教育方面に才能を有する者は皆合同して伝道運動に従事すべし。而して各々事務的団体を作るも可なり。各々特殊なる機関雑誌を發行するも可なり。然れども総てを通じ全体を統一して、大なる社会党は之を存立せしむべし。共同の敵と戦い、共同の運動を為すべき中心は之を存立せしめざる可からず。斯くの如くにして初て大理想を有する政党たることを得るに非ざる乎。(中略)

政党が枝葉問題までを党議として決定し命令するは、政党の規模を小ならしむる所以なり。政党の規模を小ならしむるは黨員を束縛する所以なり。黨員を束縛するは其精神元気を枯渴せしむる所以なり。而して遂に墮落せしむる所以なり。(中略)

日本社会黨員諸君、予は、甚だ多忙なる諸君に対して余り冗長の言を呈せり。然れども日本社会党の前途を思つて聊か憂うる所ありて然る也。議会政策と直接行動の可否に就ては、予未だ多くを考えず。欧米の諸先輩が熱心に之を論議しつゝあるに係わらず、予は社会主義其ものゝ上よりして差程に重大なりと思わざりし也。高遠なる社会主義の理想を実現すべく、其手段方法に就て諸説の生起するは寧ろ当然なれば也。唯だ予の憂うる所は、

斯る問題が党の重大問題となる如く然かく組織せられたる党其もの、構造にあり。(中略)

重大なる意義を有する大会は当に開かれんとす。日本社会党員諸君、希くは最も慎重なる態度を以て此大会の目的を完うせられんことを。」

さらに石川は、「何とかして分裂を避けたいという念願から……大会当日になつて入党までし」た。日本社会党第二回大会は二月一七日、神田錦輝館において開かれた。大会はまず規約改正を行ない、従来日本社会党がとつてきた党則第一条の「本党は国法の範圍内に於て社会主義を主張す」という穩健な立場を放棄し、「本党は社会主義の実行を目的とする」と改めた。議事は役員改選・万国社会党大会に関する件などと進出した。役員改選においては、石川は二〇名の評議員の一人に選ばれた。そして最後に評議員会作成の決議案を、堺が提案した。

「決議案

我党は現時の社会組織を根本的に改革して、生産機關を社会の公有となし人民全体の利益幸福の為に之を經營せんと欲する者なり

我党は此目的を持し現時の情勢の下に於て左の件々を決議す

一、我党は労働者の階級的自覚を喚起し其団結訓練に勉む

一、我党は足尾労働者の騷擾に対し遂に軍隊を動かして之を鎮圧するに至りしを遺憾とし、之を以て甚しき政府の失態なりと認む

一、我党は世界に於ける諸種の革命運動に対し深厚なる同情を表す

一、左の諸問題は党員の随意運動

い、治安警察法改正運動

ろ、普通選挙運動

は、非軍備主義運動

に、非宗教運動」

堺の説明が終わるとまず田添が立って議会政策論を展開して、修正案を提出した。それは決議の第二項として足尾事件の前に「一、我党は議会政策を以て有力なる運動方法の一なりと認む」の一項を加え、後段の「ろ、普通選挙運動」を削除するというものであった。続いて幸徳が立ち、直接行動論を展開して、決議の第一項「我党は」のつぎに「議会政策の無能を認め専ら」の一句を加え、同じく後段の「ろ、普通選挙運動」を削除せよという修正案を提案した。大会はこの三者に続いて赤羽一・石川三四郎・松崎源吉・金子新太郎・竹内善朔らが三時間に及ぶ討論を展開した後、採決にはいった。結果は田添案二票、幸徳案二二票、評議員会案二八票で、かくして折衷的な評議員会案を可決した。大会閉会後開かれた臨時評議員会で、石川三四郎は堺利彦とともに最高幹部である幹事に選ばれた。

ところで党大会の席上に現われた急進的な動向は、政府を大いに刺激し、大会決議と幸徳の演説を掲載した日刊『平民新聞』二月一九日号は、発売禁止となり、発行人兼編集人の石川は、七月三十一日控訴公判で禁固四カ月に処せられた。さらに二月二二日には、日本社会党まで西園寺内閣によって結社を禁止された。政党ぎらいの石川は、

